

(こびとの囁き その4 うそ)



小太郎君のお父さんの名前は太郎と言います。

小太郎君は太郎の小せがれだから、小太郎、弟の小次郎君は2番目の小せがれだから小次郎と名付けられました。

小太郎君と小次郎君は以前の学校で先生やみんなに、その名を呼ばれるたびに少しイヤな気になり、兄弟でそのことを話し合ったこともありました。

「なんか、いい加減だよな。1番目に出来たから第一小学校、2番目だから第二小学校みただい。ナンバースクールは仕方ないけど、ナンバ―子供はちよつとなあ」

結構しっかり者の小次郎君は、どこで聞き込んだのか、ナンバースクールという英語を使って不満を述べたりもしました。それを聞いて小太郎君はちよつと驚いたりもしました。

それと、小太郎君は、名前に「小」の字が付いているのもイヤでした。大きなお父さんに対してなんとなく「小者」と見られているような気もするし、なんとなくお父さんの「小物」で持ち物みたいな気がしたからです。

小太郎君は、それを思うと幾分悔しい気がして、心の中でお父さんに「負けたくない」と思うことがしばしばありました。弟の小次郎君は、鼻から「どうせかないっこない」と競いあいを諦めているらしく、この件にかんしては全くの脳天気で、対岸の火事とばかりに馬耳東風を決め込んでいました。

同じ子供でも長男と次男ではかなり違います。それは恐らくお父さんの扱いにもよるのかもしれない。とにかくことあるごとにお父さんは小太郎君に「長男だから」「跡取りだから」を連発していたのです。「飲み会の鍋の締めはうどん」の代わりに、お話の締めは「長男だから」みたいな感じで、まるでそれがないと宴が閉まらないかのようにでした。

小次郎君は「あ、また言っちゃあ」で済みましたが、小太郎君は毎回、テレビ映画のミッ

シヨン・インポッシブルで「おはよう、フェルプス君、ところで今日の」から始まる極秘任務を与えられたかのように、緊張するのを感じました。テレビ映画は面白かったのですが、それが自分の身に起こるとなると良い気持ちはしませんでした。

ある日、朝から寒気がして仕方がなかったのですが、小太郎君は少し無理をして登校しました。

しかし、お昼の給食前になって、頭がぼーっとして、寒気も留まらないので、先生に許してもらって保健室に行くと、はかった体温計が38度5分のあたりを指していました。

「小太郎君、すごい熱よ。用務員さんに言って、自転車を送ってもらえるようお願いするか、直ぐに帰りなさい」

保健室の先生は、小太郎君の身を心配してそう言いました。

小太郎君は、それを聞いて、はたと困ってしまいました。

「大丈夫です。独りで帰れます！」

「何言っているの。途中で遭難したらどうするのよ。遠慮はいらないから送ってもらいなさいね」

実は、小太郎君は、保険の先生の申し出を聞いたときに、すぐさま「ヤバイ！」と思ったのです。

と言うのも、学校に住んでいる住所として届けてある家は、越境入学で所番地をかりているだけで、実際には住んでいなかったからです。それに、その場所がどこなのかうる覚えでしかないこともありました。

「ばれる！ばれたらヤバイ！」

しかし、そんな説明は口が裂けても言えませんから、小太郎君はいわれるがままにせざるをえませんでした。

これは後々分かった話ですが、この小学校には、そうした子達が結構いて、学校側にとってもそれは「暗黙の了解事項」だったので、その頃の小太郎君は、そんなことを知るよしもありませんでした。

一見野放図に見えて、根が真面目な小太郎君は、越境先ではなくて、本当の住まいに帰ったのでは、せっかく「一味で口裏合わせをした」のに間抜けな自分がドジを踏んで越境の嘘がばれてしまい、そのせいで「捜査陣の矛先」が親に向けられるはめになったら迷惑がかかると思っ、自分が寝起きしている住まいではなく、うる覚えの越境先の住所へと案内したのです。

小太郎君はテレビの刑事物が大好きでしたから、頭の中にそんな諭えの言葉が浮かんできたのですが、そんな諭えをして遊んでいる場合ではありませんでした。

早く本当の家に帰りたいのは山々なのですが、まずは越境先の家に案内しないことにはその先に進めません。しかも当然うる覚えですから、あっちへ案内したりこっちへ誘導したりになります。

「え、君、自分ちもよくわかんないの？なんか隠してない？」

そんなことを、自転車をこいでいる用務員さんが、突如振り向いて、刑事みたいな疑いの目を向けながら言うのではないかと、小太郎君はひやひやして落ち着きませんでした。

それでもやっとその住所の家にたどり着きました。

小太郎君は用務員さんに送ってもらったお礼を言いましたが、その家の中に勝手に入るわけにはいかなので、仕方なく「もう大丈夫ですから」と早々に用務員さんが学校に戻るように促し、その用務員さんが角を曲がって見えなくなったのを確かめてから、やおら自分の本当の家に向かって歩き出しました。

それにしても本当の家までの道のりはかなり長いものでした。小太郎君は悪寒と関節痛とだるさでふらふらになりながら遠い道のりを家まで歩いて帰りました。その家は小太郎君の家とは正反対の方角だったので、辛い身体なのに、いつもの二倍の距離を歩かなくてはならなかったのです。

小太郎君は、つめたい風にさらされて歩きながら

「一体僕は何をしているんだろう？なんでこんなことしてるんだろう？なんでこんなことをするようなことになっちゃったんだろう？」

と、しばらく前から自分の身に起き始めている「今までとは全然違う」出来事の数々が飲み込めなくて、何度も何度も自分に問いかけました。

ですが、小太郎君は家に戻ってもなぜか越境先の家に行ったこととその疑問のことは親には言いませんでした。ただ風邪をひいて熱が出たから早退してきたとだけ言いました。

前の小学校の友達を裏切り、保健室の先生に嘘をつき、用務員さんにも嘘をついてしまった。なんか自分がだんだん「いやな人間」になっていっている気がしました。そんな風になっている自分のことを親が知ったらさぞかし自分のことを嫌うだろうと怖れて言えなかったのかもしれない。

発熱による身体の辛さより、遙かにそのことが小太郎君にはこたえました。

「え？それ本当？うそじゃないの？」

あのこびとの囁きが、この前とは違った言葉になって、何かをするたびに耳元でするようになりました。

ちびた君のグサリ、お父さんのズドン、そうして今日のうそ。

それやこれやが積み重なっていたようです。次第に小太郎君は、自信はおろか、自分のことが少しづつ嫌いになり始めていました。そうして、この日以来、丸顔童顔の小太郎君の顔から、屈託のない明るい笑顔が次第に消えていったのでした。